

「か」疑問文における「か」の省略について

鄭 夏 俊

【キーワード】 問いかけ、働きかけ、述べ立て、疑い、詠嘆、語用論的丁寧さ

1. はじめに

日本語には「か」という助詞がある。この助詞には主に二つの使い方があるが、その一つはいつも文末に現れ、疑い・問いかけ・反語・言い返し・詠嘆などを表す用法で、一般的に終助詞と呼ばれている。もう一つは文中に使われるもので、不確かな気持ちを表す、あるいはいくつかの物事や動作を並べ、その中から一つを選ぶ意味を表すといった用法で、一般的に副助詞と呼ばれている。次の例文の(1)～(3)が終助詞の用法、*1(4)～(6)が副助詞の用法の文である。

(6)の場合、並立助詞とも言う。

- (1) あなたはどなたですか。
- (2) いっしょに遊びに行かないか。
- (3) そんなことがあるはずがあらうか。
- (4) 何かほいしいものがありますか。
- (5) 時間が早すぎたのか、会場にはまだだれも来ていなかった。
- (6) ふだんは忙しいから、土曜日の午後か日曜日に来てください。

上の文から「か」を省略すると次のようになるが、

- (1') あなたはどなたです*2。
- (2') 一緒に遊びに行かない*2。
- (3') ?そんなことがあるはずがあらう。
- (4') ?何かほいしいものがありますか。
- (5') ?時間が早すぎたの、会場にはまだだれも来ていなかった。
- (6') ?ふだんは忙しいから、土曜日の午後日曜日に来てください。

(1') (2') は(1) (2) と比べてほとんど文の表す意味において違いが見られないが、(3')～(6') は(3)～(6) の文と比べて日本語として変な文になっている、あるいは意味にずれが生じている。副助詞の「か」の場合、(4')～(6') のように「か」の省略が許されないが、終助詞の場合は(1) (2) のように省略可能なものと(3) のように省略不可能なものがある。このように「か」が終助詞として使われる「か」疑問文においての「か」の省略にゆれが見られるのはどうしてであろうか。どういう条件の下で「か」の省略が起こる、あるいは

起こらないのであろうか。また、「か」の省略された文とされていない文との間にはどういう意味の違いがあるのであろうか。これから解いていくことにしよう。

2. 「か」疑問文の諸相

疑問表現には話し手が聞き手に向かって何かを問うものと聞き手に向かって何かを問うのではなく何かについて話し手が自分自身に疑問を投げるものがあるが、前者を質問、問いかけ、後者を自問、疑いと呼ぶのが一般的である。ところが、「か」疑問文には問いかけでもなく、疑いでもないものがあるが、それは話し手が「か」疑問文の形式を借りて聞き手にある行動を起こすことを働きかけるものと話し手が自分の主張を強く述べるあるいは自分の気持ちや感動を強く表すものである。これを小論ではそれぞれ「か」働きかけ文、「か」述べて文、「か」詠嘆文と呼ぶことにする。そうすると「か」疑問文には聞き手目当ての問いかけ文、働きかけ文、述べて文と聞き手目当てではない疑い文、詠嘆文、という五つの違う文的意味を持つ「か」が存在することになる。^{*3}

2.1. 「か」問いかけ文

「か」問いかけ文には命題内容に対する真偽判断あるいは情報提供を求める

(A) 判断の問いかけ文、問いかけの対象が命題内容そのものというよりも命題内容に対する聞き手の心的態度を問いかける (B) 情意の問いかけ、話し手がある意志を遂行することを、聞き手が是認・受け入れる意向があるか否かを、聞き手に問いかけている (C) 意向の問いかけ文がある。

2.1.1. 判断の問いかけ

判断の問いかけは(7)のように「はい」「いいえ」という答えを要求する「Yes-No 疑問文」と(8)のように「はい」「いいえ」という答えを要求するのではなく、話し手が複数の情報を提示し、どれが正しいか、どれを選ぶか、聞き手にその中の一方を選んでくれることを要求する「選択要求疑問文」と(9)のように疑問文の焦点に当たる部分だけの情報を要求する、いわゆる疑問詞を含む「WH 疑問文」に分けることができる。

(7) これはあなたの本ですか。

(8) 漢字はむずかしいですか、やさしいですか。

(9) あなたはどなたですか。

2.1.2. 情意の問いかけ

情意の問いかけには(10)のように聞き手の意志を問いかける文と(11)(12)のように聞き手の希望を問いかける文がある。

(10) 先生はあした学校へいらっしゃいますか。

上の例文の意味は次の(10')とほとんど同じである。

(10') 先生はあした学校へいらっしゃるつもりですか。

つまり、(10')は(10)の文が持つ聞き手の心的態度が「つもり」ということばによって顕在化したものである。(10)の例文が(10')のように意志の問いかけという意味を持つためには二人称ガ格、意志動詞非過去形という構文的条件を備えなければならない。

(11) 冷たい水が飲みたいか。

(12) 私にそれをやってほしいか。

上の例文は両方聞き手の希望を問いかけているが、構文的には少し異なる点がある。(11)の「～たい」文では聞き手の希望の対象である「水を飲む」の主体が聞き手自身であるのに対し、(12)の「～てほしい」文では「それをやる」の主体が聞き手ではなく、命題内容の実際の行動主である二格である。

2.1.3. 意向の問いかけ

(13) その仕事私がやりましょうか。

(14) タクシー呼びますか。

上の例文の意味は次の(13') (14')の意味とほとんど同じであると思われる。

(13') その仕事私がやってもいいですか。

(14') タクシー呼んでもいいですか。

つまり、意向の問いかけというのは話し手が自分が行う動作に対しそれを受け入れてくれる意志・意向が聞き手側にあるかどうかを問うものである。そうすると当然動作主は一人称ガ格ということになる。

2.2. 「か」働きかけ文

「か」働きかけ文は疑問表現としての文形式を有してはいるものの、もはや、答えを得ることを目的とした機能を果たしているのではなく、誘いかけや依頼、命令、すすめといったあり方で、話し手が自らの要求の実現を働きかけ・訴えかけるといったものである。

2.2.1. 誘いかけ

(15) さあ、ひと休みしようか。

(16) たけし、もうそろそろ帰るか。

(17) (私と一緒に) スキーに行きませんか。

誘いかけというのは話し手が聞き手に話し手と同じ行動をとることを呼びかけることである。意向の問いかけの(13)と誘いかけの(15)、意向の問いかけの(14)と誘いかけの(16)はそれぞれ「～しようか」「～するか」という共通の文末表現を有しているが、文の表す意味は違う。なぜなら(13) (14)の場合、

動作主が一人称ガ格であるのに対し、(15) (16) の場合、一人称・二人称ガ格、即ち話し手・聞き手を含めた一人称複数ガ格であるという人称制限によるものである。(17) の文は肯定疑問文「スキーに行きますか。」という文が聞き手の意志の問いかけを表すのに比べて「スキーに行く」という行動をとる主体が話し手と聞き手であるので、誘いかけという意味が生じる。

2.2.2. 依頼・命令・すすめ

誘いかけが話し手と聞き手が一緒に同じ行動をとることを求めているのに対し依頼・命令・すすめは話し手が聞き手にある行動をとるように求める表現である。依頼とすすめは「頼む」「すすめる」という意味を持っていることから分かるように命令表現に比べて柔らかな表現になっており、「依頼」は「～してくれるか」「～してくれないか」「～してもらえるか」「～してもらえないか」といった形をとっており、「だろうか」がつくとより丁寧な依頼文になる。すすめは「ないか(ませんか)」命令は「ないか」の形をとっている。

(18) a 暇なとき、また来てくれるか。

b 暇なとき、また来てくれるだろうか。

(19) おまえら、静かにしないか。

(20) 食べない(食べません)か。

(19) が命令の意味になるためには動詞は意志動詞非過去否定形、動作の主格は二人称ガ格、イントネーションは下降調で強調を伴わなければならない。また文体は非尊敬・普通体でなければならない。すすめは聞き手にある行動をとることを求めるという点では命令と同じであるが、要求の度合い、即ち丁寧度においては命令よりも高い丁寧さを表すものであるので、(20) のように普通体も丁寧体も可能である。

2.3. 「か」述べ立て文

「か」述べ立て文には命題内容の成立・不成立に関して、ある傾き・予測を持って聞き手に問いかける傾き・確認・同意要求の述べ立て文、話し手が疑問表現の形式を借りて強く自分の主張を行う反語の述べ立て文がある。

2.3.1. 傾き・確認・同意要求の述べ立て

(21) ここに何か秘密があると思わないか。

(22) おまえ、あいつが来ると思うか。

(23) この部屋、ちょっと暑くないか。

(24) こっちのほうがいいじゃないか。

傾き・確認・同意要求の述べ立ては、判断の問いかけが命題内容に対しその事態の成立が現実の世界あるいは与えられた仮想の世界において真であるか偽であ

るかを問うものであるのに対し、話し手が命題内容の持つ事態の成立に対し聞き手に問いかける前にすでに話し手なりの判断が成立しており、話し手は自分の判断を聞き手に押しつける、あるいは同意してくれることを求めるものである。上の例文はそれぞれ次のような話し手の主張を述べているものであるということが出来る。

(21') 私はここに何か秘密があると思う。

(22') 私はあいつは来ないと思う。

(23') 私はこの部屋ちよつと暑いと思う。

(24') 私はこっちのほうがいいと思う。

2.3.2. 反語の述べ立て

反語表現とは、疑問表現の文形式を借りて命題内容とは逆の事態を話し手が強く主張するものである。

(25) どうしてそんなことが言えようか。

(26) ぼくがそんなばかなこというか。

上の例文の表す真の意味は次のようであると言える。

(25') そんなことは言えない。

(26') ぼくはそんなばかなことはいわない。

2.4. 「か」 疑い文

「か」 疑い文には話し手が発話時の直前までは不明だった命題内容が発話時になってやっと理解・納得できたことを表す (A) 自問納得の疑い、話し手が命題内容に対し下した推し量りの判断についての疑問を表す (B) 推し量りの疑い、話し手が自分の意志に対する戸惑いを表す (C) 意志の疑いがある。

2.4.1. 自問納得

(27) もう 12 時か。そろそろ寝よう。

(28) そうか、傾いてないか。

自問納得というのは発話の直前まで知らなかった事柄を発話時になってやっと知ったあるいは理解・納得できたということを表すものであり、発話の場が話し手単独の場であれ、聞き手が共存する場であれ、話し手自身に向けた発話でなければならない。自問納得文は通常下降調のイントネーションで発せられる。^{*4}

2.4.2. 推し量りの疑い

(29) 太郎は帰ってくるだろうか。

(30) 私にもこんな大事な仕事ができるだろうか。

推し量りの疑い文即ち「だろうか」文は、話し手が命題内容に対しそれが真で

あると信じ切ることにはできないが、「太郎は帰ってくるか。」のような判断の放棄ではなく、話し手自身の命題内容が真であると信じ切れない信念の弱さを表す「だろう」文に疑いを表す「か」がついたもので、話し手の命題内容に対する非常に弱い判断を表している。判断の程度差という面からすると次のような順序づけが可能である。

- 1 太郎は帰ってくるㄥ。
- 2 太郎は帰ってくるだろうㄥ。
- 3 太郎は帰ってくるだろうかㄥ (or ㄱ)。
- 4 太郎は帰ってくるかㄱ (or ㄥ)。

1は「太郎が帰ってくる」ことを信じ切っているもので確信度が一番強い。2は1ほど信じ切っていないが、ある程度信じているので、確信度は普通であると見ることができる。3の文は話し手自身の弱い判断（推し量り）への疑いを表すものであり、普通の確信度に疑いを抱いているので、確信度は非常に弱くなる。4は「太郎が帰ってくる」ことに対し判断ができないため、確信度は0である。

例文（3）も推し量りの疑い文である。

2.4.3. 意志の疑い

(31) よし、やるか。

(32) そろそろ帰ろうか。

意志の疑い文は話し手がある事柄に対してそれを実行する意志が自分にあるかどうかをはっきりと決めかねている意志の迷い、あるいは自分自身への積極的な励ましを表すものである。当然動作主は一人称ガ格である。意志の疑い文は意向の問いかけと誘いかけの問いかけと同じ文末表現形式「～するか」「～しようか」を用いているが、意向の問いかけと誘いかけの問いかけが聞き手がいなければならず、普通体でも丁寧体でも使われるのに対し、意志の疑い文は聞き手に向けた発話でないので、聞き手はいなくてもかまわないが、いつも普通体でしか使われないものである。

2.5. 「か」詠嘆文

(33) あの芝居を見ながら、何度泣いたか。

(34) どんなに待ったか。

(33) (34) は話し手の嘆きや感動を表すものである。聞き手は発話現場にいてもいなくても構わないが、聞き手のいる場合も直接聞き手に向けた発話ではないので、聞き手に何かの答えを要求するのではなく、話し手の強い気持ちを間接的に述べているだけである。これらの文の表す意味は次のようである。

(33') あの芝居を見ながら、何度も何度も泣いた。

(34') 非常に長い時間待った。

その他にも「か」詠嘆文には次のようなものがある。

- ・あの芝居を見ながら、何度泣いたことか。
- ・どんなに待たせようか。

3. 「か」疑問文における「か」の省略

先述の「か」疑問文の下位タイプに従ってこれから「か」が省略されると、省略されていない文と比べてどういう意味の違いが出てくるのかについて検証して行きたいと思う。

3.1. 「か」問いかけ文における「か」の省略

3.1.1. 判断、情意の問いかけ文における「か」の省略

- (7') これはあなたの本です。
- (8') 漢字はむずかしいです、やさしいです。
- (9') あなたはどなたです。
- (10') 先生はあした学校へいらっしゃいます。
- (11') 冷たい水が飲みたい。
- (12') 私にそれをやってほしい。

上の例文の場合、「か」の省略されていない文との意味においての違いを比べてみるとほとんど違いはないといってもいいと思われるが、話し手と聞き手との待遇表現上の親疎関係からすると、「か」省略文のほうが「か」文よりはもっと話し手の聞き手に対する親しみを表す表現であると言える。

3.1.2. 意向の問いかけ文における「か」の省略

- (13') その仕事私がやりましょう。
- (13'') その仕事私がやりましょう。
- (14') タクシー呼びます。

(14')は話し手と聞き手との待遇表現上の親疎関係を除いてほとんど意味において(14)との違いがないと思われるが、(13'') (13''')と(13)とは意味において違いが見られる。(13)の文の意味は話し手が自分が行う行動に対しそれを受け入れてくれる意志・意向が聞き手側にあるかどうかを問うものであるのに対し、(13'')の文の意味は話し手が自分の行いたい行動を聞き手に強く申し出る表現である。(13''')の文は文末の音調が上昇調になっているため、申し出の意味が弱まってはいるものの、意向の問いかけの意味よりは申し出の意味の方が強いと思われる。両者の間には話し手が聞き手にある行動を起こすことへの許可を願っているという点では大きな違いはないように思われるが、程度差においては大きな違いがある。つまり「か」文の方が聞き手の意向を問う形をしているので要

求表現における語用論的な丁寧度においては「か」文の方が「か」省略文より丁寧度が高いのである。^{*5}

3.1.3. 「か」問いかけ文における「か」の省略のまとめ

「か」問いかけ文において「か」が単独でモダリティを構成している場合は「か」が省略されてもほとんど意味における違いはないが、「う・ようか」のように他のモダリティ形式と結びついた(13)の「意向の問いかけ文」の場合、その意味(丁寧さ)に違いが現れる。また「か」省略文の方が聞き手に親しみを表すという違いが共通的に見られる。

3.2. 「か」働きかけ文における「か」の省略

3.2.1. 誘いかけ文における「か」の省略

(15') さあ、ひと休みしよう。

(16') たけし、もうそろそろ帰るヲ。

(17') (私と一緒に) スキーに行きませんヲ。

(16') と (16)、(17') と (17) は待遇表現上の親疎関係以外はほとんど意味においての違いがない。(15) の文で「か」を省略した (15') の文は誘いかけという意味においては大きな違いはないが、丁寧さという点では (15) が聞き手に休む意向があるかどうかを問う形をとっているのに対して (15') は話し手の休みたいという意志が強く働き、聞き手にも一緒に行動をとってくれることを要求する表現になっているので、(15) の方が (15') より語用論的にはもっと丁寧である。

3.2.2. 依頼文・命令・すすめにおける「か」の省略

(18') a 暇なとき、また来てくれるヲ。

b 暇なとき、また来てくれるだろう。

(19') おまえら、静かにしないヲ。

(20') 食べない (食べません) ヲ。

上の文は (18') b を除いては「か」の省略されていない文と比べて待遇表現上の親疎関係以外に意味においての違いはないが、命令の場合、命令という意味の性格上、「か」の省略の持つ親しみという意味が現れにくい。(18') b は文末の音調が上昇調の場合、確認要求文になり、「だろうか」の持つ語用論的な丁寧さの意味がなくなるため、^{*6} 要求の度合いにおいて大きな違いが出てくる。下降調の場合は推し量り文になる。

3.2.3. 「か」働きかけ文における「か」の省略のまとめ

「か」働きかけ文においては「か」が単独でモダリティを構成しているときは「か」が省略されてもほとんど意味における違いはないが、「う・ようか」「だろなか」のように他のモダリティ形式と結びついた場合は行動要求の度合いにおいて違いが現れる。その他、「命令の働きかけ文」を除いては「か」省略文の方が聞き手に親しみを表すという違いが共通的に見られた。

3.3. 「か」述べ立て文における「か」の省略

3.3.1. 傾き・確認・同意要求文における「か」の省略

(21") ここに何か秘密があると思わない?

(22") おまえ、あいつが来ると思う?

(23") この部屋、ちょっと暑くない?

(24") こっちのほうがいいじゃない?

(21") ~ (24") の文と「か」の省略されていない文とは待遇表現上の親疎関係以外に意味においての違いがない。

3.3.2. 反語文における「か」の省略

(25") どうしてそんなことが言えよう。

(26") ぼくがそんなばかなこという?

反語文の場合は「か」が省略されてもほとんど意味に違いは見られない。それはもともと反語文というのが聞き手に問いかけるという形式を借りて強く自分の主張を行うという性格のものであるということを考えると WH 疑問詞や文末の音調の力を借りて「か」に代わって問いかけの機能を果たしているので当然のことと思われる。

3.3.3. 「か」述べ立て文における「か」の省略のまとめ

「か」述べ立て文においてはすべて「か」の省略が可能であり、意味における違いもほとんどない。

3.4. 「か」疑い文における「か」の省略

3.4.1. 自問納得文における「か」の省略

(27") もう 12 時、そろそろ寝よう。

(28") そう、傾いてないか。

(27") と (28") は「か」の省略されていない文と比べ、「納得」という意味においては違いが見られないが、「自問」という意味はなくなっている。自問納得文は「か」が省略されてもニュアンスの違いはあるにせよ、実質的な文の意味

において違いはほとんどないと言っていいと思われる。

3.4.2. 推し量りの疑い文における「か」の省略

(29") 太郎は帰ってくるだろう。

(30") 私にもこんな大事な仕事ができるだろう。

(29") と (30") は「か」の省略されていない文と意味において大きな違いが見られる。(29") (30") は推し量りの疑いの文ではなく、文末の音調が下降調の場合は推し量り文、上昇調の場合は確認要求文になる。その他、「う・ようか」推し量り文は(3')のように省略不可能な場合と

・そんなこともあろうか。

・そんなこともあろう。

のように省略されると、意味の違いが大きい場合もある。

3.4.3. 意志の疑い文における「か」の省略

(31') よし、やる。

(32') そろそろ帰ろう。

(31') は話し手の意志の疑いを表す文ではなく、話し手の意志を表す文である。

(32') も話し手の意志の疑い文ではなく、正常な文になるためには話し手の意志を表す文か、相手を誘いかける文にならなければならない。(31) (32) が話し手の自分自身への積極的な励ましを表し、語用論的には話し手の意志を表すこともあるが、もうすでに意志を決めている(31') (32') と比べると、意志決定の度合いにおいて差が見られる。しかし、語用論的な文の意味においては両方話し手の意志を表すと言う点でほぼ同じであると思われる。

3.4.4. 「か」疑い文における「か」の省略のまとめ

「か」が単独でモダリティを構成している場合と意志の疑いの「う・ようか」の場合は、「か」が省略されても意味における違いは微妙な違いはあるにせよ、実質的な意味の違いはほとんどないと言っていい。推し量りの疑いの「う・ようか」の場合は省略不可能なものと省略されては意味に大きな違いが出てくるものがあり、「だろうか」の場合は省略されると、大きな意味の違いが出てくる。

3.5. 「か」詠嘆文における「か」の省略

(33") * あのしばいを見ながら、何度ないた。

(34") * どんなに待った。

上の詠嘆文の場合は「か」の省略ができない。ところが、次のような「か」詠嘆文の場合、「か」の省略が「ことか」文は不可能であるが、*「だろうか」文は可能であり、意味の違いもほとんどない。

・＊ あのしばいを見ながら、何度泣いたこと。

・ どんなに待たせよう。

その理由は「だろうか」詠嘆文ではすでに「か」の持つ詠嘆性というものがかなり弱まって「だろう」の方に詠嘆性の比重が大きくなっているからだと思われる。この「だろうか」は、語用論的な丁寧さを表す「だろうか」の結びつきが強いことに比べて結びつきが弱いので、それだけ「か」の持つ詠嘆性も弱くなるのも当然であろう。

4. おわりに

以上、日本語における「か」疑問文の諸相と「か」疑問文における「か」の省略について見てきた。上で述べたことがすべての「か」省略現象を扱っているのではないが、一応扱った範囲の中では次のようなことが分かった。

「か」省略現象は、文末の「か」が単独でモダリティを構成しているときは、(問いかけ文、働きかけ文、述べ立て文>疑い文>詠嘆文)の順で、「か」の省略が起こりやすいという傾向が見られる。これは「か問いかけ文」「か働きかけ文」「か述べ立て文」が聞き手を目当てにする発話であること、「か疑い文」「か詠嘆文」が聞き手を目当てにする発話ではないことと大きな関わりがあるように思われる。つまり、「か」が問いかけ性を持ち、聞き手を目当てにする発話の場合は省略の可能性が高くなり、省略されてもあまり意味の違いが出てこないが、疑い性や詠嘆性を持ち、聞き手を目当てにする発話ではない場合は省略の可能性が低くなり、省略されては意味の違いが大きくなるということである。

「う・ようか」「だろうか」「ことか」のように他の形式と結びついてモダリティを構成しているときは、省略可能な場合も不可能な場合もあり、省略可能な場合でも意味においての違いが大小様々であるなど、複雑であるが、省略不可能であるということは「か」の持つ問いかけ性や疑い性、詠嘆性という意味が正常に働いているということであり、省略可能ということは「か」の持つ問いかけ性や疑い性、詠嘆性の意味がそれだけ弱まっているということであろう。また、特徴的なことは意向の問いかけ文の「う・ようか」働きかけの「う・ようか」「だろうか」の「か」には話し手の聞き手に対する要求の度合いを和らげるという語用論的な丁寧さを表す働きがあるということが「か」の省略文との対比によってはっきりと現れてきたということである。

以下、「か」疑問文の下位タイプを中心に「か」の省略についてまとめると次のようである。

- 1、「か」問いかけ文：省略可能。但し、「う・ようか」意向の問いかけ文の場合、意味の違い少々あり。
- 2、「か」働きかけ文：省略可能。但し、「う・ようか」誘いかけ文の場合、

意味の違い少々あり。「だろうか」依頼文の場合、
多々あり。

3、「か」述べ立て文：省略可能。

4、「か」疑い文：自問納得と意志の場合は省略可能で、実質的な意味においてはほとんど違いがないが、ニュアンスの違い少々あり。
推し量りの「だろうか」は多々あり。推し量りの「う・よ
うか」文は省略不可能なものと省略されては意味に大きな
違いが出てくるもの両方あり。

5、「か」詠嘆文：「か」詠嘆文は省略不可能であるが、「ことか」詠嘆文は
述語が動詞の場合、不可能。述語が形容詞の場合、可能。
「だろうか」詠嘆文は可能。

注

- *1 日本語教育学会 1982『日本語教育事典 縮刷版』大修館書店 p.410 には
「明日試合が行われるか分からない。」などは一方においては終助詞、一方
においては副助詞として解釈が可能であるという記述があるが、小論では文
の最後に現れる「か」だけを終助詞として認める立場をとる。
- *2 「あなた（は）どなたス。」の方がより一般的であろう。
- *3 「か」疑問文の分類や用語において仁田義雄（1991『日本語のモダリティ
と人称』ひつじ書房）のものを大きく借用したことを断っておく。
- *4 仁田（1991）p.147 参照
- *5 要求表現における語用論的な丁寧さを表す要素として鄭夏俊（チョンハジュン
1991「日本語における語用論的な丁寧さについて」『国語学 研究と資
料』第15号 国語学研究と資料の会 p.46-p.50）は A.疑問文の形をと
る B.話し手側の可能性を問う形をとる C.話し手側の希望という形をとる
D.やや遠慮がちな表現をとる E.暗示の表現をとる、という五つの要素をあ
げている。
- *6 *5 の D.やや遠慮がちな表現をとる、を参照
- *7 「ことか」の場合、前にくる品詞が形容詞の場合は「か」の省略が可能であ
る。ところが、「か」文の場合は詠嘆の意味が出てこない。
(1) 岡山の桃のおいしいことか。
(1') 岡山の桃のおいしいこと。
(1'') * 岡山の桃のおいしいか。